

NOW ON AIR

sanukisoba

灰を落としてから灰皿にタバコを押し付けて火を消す。微かに残った最後の煙とともに、燃えかすの赤い火が消えていく。それを見届けてから私はiPhoneを鞆にしまい、立ち上がりながらコートを手にとって席を離れる。退屈な仕事とつまらない人間関係しか存在しなかった平日と、明日から始まる週末の切り替え点にしているコーヒーストップはいつもと同じように閑散としていて、21時を指す時計の横の鏡に写る私の姿もいつものようにしっかりと暗い雰囲気、私は慌てて目を逸らす。会計を終えた店の外に広がる金曜日の池袋はとても賑やかで、でも、私がおもって若かった頃に比べたらとっても静かで、私はなんとはなしに空を仰いだ。狭い空には、街のネオンだけが輝いている。

池袋から少し混んだ電車で揺られて10分ほどの最寄駅から歩いて7分のところにあるアパートに私は帰り着く。途中のコンビニで買った缶ビールを入った袋をガサツに置き、立ったままヒールを脱ぐ。鍵を靴箱の上の小物入れに放り込み、床に置いていた消臭剤をヒールの爪先に突っ込んで、廊下を突っ切って部屋に入り、電気をつけ、パンツスーツを脱いだ姿で洗面所に向かう。鏡に映る自分の顔を見て見ぬふりしながらコンタクトを外す。朝、コンタクトを付けるときに外してそこに置いたままだったメガネをかけて洗面所を後にし、コンビニの袋を手にとって部屋に戻る。鏡を前にしても、私は何食わぬ顔で疲れ切った自分の何食わぬ顔から目をそらし続けている。今年で38の私は年齢と共に色々な処世術を身につける。缶のプルタブを起こしたときの音がため息をかき消し、数本の缶の中身がその後の記憶をかき消してくれる。

起きた時にはちゃんと布団に入っていて、電気も消えていて、でも中途半端に中身の残った缶だけはテーブルの上においてあった。どうして部屋の電気は消せるし布団にも入れるしメガネも外せるのに私は缶も片付けられないのだろうか。そんな感心と共に缶に残っていた気の抜けた中身を一息に流し込み、かすかな小さな泡たちが喉を刺激して、そして鮮やかに消えていく土曜日の朝。朝と云うにはためらいを生じる10時を時計は誇らしげに示している。私は「ふう」と言う掛け声とともに空き缶を両手に持ち、台所に置いてからトイレを済まし、顔を洗って、部屋に戻り、カーテンを開ける。

太陽の光が遠慮のかけらもない態度で部屋を満たす中、私は椅子に腰掛けてテーブルの上のiPhoneをいじる。待ち受けに特に連絡も表示してくれていない彼を操作して出かける予定もないのに今日の天気を示してもらい、特に気になっているわけでもないのにニュースアプリを見せてもらい、さて、と呟く。さて。気になったニュースがあるでもなく、見たいテレビがあるわけでもなく、見たいDVDがあるわけでもなく。かと言って音のない土曜日の部屋はどこか寂しく、私はラジオアプリを立ち上げる。スピーカーからは無神経なほどに明るい声が流れ出す。ラジオを毎日のように聞いていた今から20年以上前、高校生の頃は今よりもっと繊細で、傷つきやすかったのに、当時はラジオパーソナリティに対して「陽気なやつだな」なんて感じたことがなかったなと、ふと思ふ。陽気な声は今日これから開催されるイベントの説明をしていた。青山で開かれるオーガニック食品の即売会、関東近県の農家などが集まるイベントとのこと。あの頃はこう言う話題を聞くたびに働き始めた週末はこんなイベントにも行ったりするのかななどと思っていたのが嘘みたいだ。そういえば、リクエストをよく送っていたな、自分。何度か採用されてTシャツとかステッカーとかをもらっていたはず。まだどこかにあるかもしれない。

ラジオと化したiPhoneをテーブルに置いたままキッチンに立つ。お湯を沸かして冷蔵庫の中にあった食パンを焼きながらあの頃は どうしてリクエストなんてマメなことをしていたんだろうとシンクにもたれかかりながら昔の自分に聞いてみる。ぼんやり考えているうちにお湯は沸き、マグカップの中に注ぐとティーバッグが揺れながら紅茶を作り始め、食パンはトーストに変化を遂げ、トーストを皿にのせ、ティーバッグをマグカップから取り出し、それらを持って部屋に戻り、椅子に座ったところで「あれ、何考えてたっけ」と気付く。結局、私はこうして日々生じる変化や刺激を追いかけることの方が、リクエストを送ってそれが採用されるかをドキドキしながら待つことよりも多くなったということなんだろう。バターを塗りながら「そりゃ、ラジオも聞かなくなるな」と改めようと思う。ブルーベリージャムの酸味が、口に広がっていく。

そんな私の思いを知ってか知らずか、ラジオはタイムリーにも私が高校生の頃流行っていた曲を流し始める。当時はCDを買うという行為がそれなりに重みのある行為で、よほど気に入った曲しか買わなかったから記憶にある流行った曲の大半はこうしてラジオから流れてくるのを聞くだけだったなんて思い出して微笑ましくなる。今の自分は欲しいと思ったCDに使うお金なんて小銭感覚。それがいいのか悪いのかは、わからないし、そもそも最近CDなんて買っていないし、欲しいと思う曲なんて出会っていないけど。

当時も今と同じように他にすることもなくて、テレビ、漫画、本、色々試した結果たどり着いたのがラジオだった。それこそ前はメッセージを送ったりしていたけれど、今こうして特にしたいこともすることもなく、土曜日の昼間に朝ごはんだけ昼ご飯だけかわからないようなパンにかじりつきながらラジオにただ、完全に受動的に耳を傾けるだけの私は、本質的には多分、あの頃と何も変わっていないんだろう。

流れる曲は気持ちよさそうに盛り上がりを迎えている。私は気がつけば曲に合わせてハミングをしていた。当時はどうしてヒットチャートなんかに興味を持っていたんだろう。どの曲が流行っているかを気にしていた感性というのが今となっては何も理解できない。自分が好きなものを好きでいれたいし嫌いなものは嫌いでいれたい。自分に好かれようとしなくても好きなものになる必要もない。当時この曲を聴いた私は、こんな考えを将来するようになるなんて思ってもいなかった。リクエストと共にあの日の自分にメッセージを添えて送りたい。

懐かしい曲は終わり、最近のヒット曲に席を奪われる。ゆっくりと食事を片付け、食器を持ってキッチンに向かうとラジオは交通情報に切り替わる。流れる水の音の合間で切れ切れに聞こえる道路情報は、こうやって家で過ごす私には関係ないエリアの関係のない渋滞情報を流暢に語り続ける。「東北道」という単語を聞いたときにそういえば会社の同僚の子は今週末那須に行くとか言っていたなと思出す。彼女は私と同期なのにとってもアクティブで、人気者で、きっと夜になれば今日の出来事をSNSに写真付きでアップしてくれるんだろう。あの子が羨ましいとも思わないしあなりたいとも思わないけれど、彼女の目から見える世界はどんな世界なんだろうというのが気にならないといえれば嘘になる。でも、私は一体そんな世界を見てどうしたいんだろう。先のことも考えず、したいこともなく、刹那的に生きるだけの私が今後の人生を生き抜くためのヒントがそこにあるかもしれないから、だろう。

交通情報が終わり、ニュースが読み上げられ、私は洗い物を終えて部屋に戻り、ラジオは海外の曲を流し始める。

読みかけの本を手にとってベッドに横になる。ラジオをBGMに本を読む。本当、昔と何も変わってない。さざなみのようなパーソナリティのお喋りと、風音のような音楽を背景にページを繰っていく。本の中も、ラジオで紹介されるエピソードも、全てが刺激に満ちていて私の人生とは大違い。「ふう」と今度はため息のように息を吐き本を胸に置いて目を閉じる。眠れるなら少し、眠りたい。眠れないなら、ラジオに耳を傾けたい。刺激は一度にいくつも要らない。

眠れないままに聞き続けるラジオは相変わらずニュースに満ちている。土曜日の昼間にこうして寝転んで一人ラジオを聴いてる人がいることなんて、ラジオを放送してる人たちは知らないんじゃないのかな、って投稿したくなるくらい、ラジオの語る世界と私の視界に入る世界には大きな違いがある。当時はそんな私の知らない世界に憧れ、近づこうとしていた。今は、そんな世界どこにあるんだろうね、の一言で終わらせてしまっている。どうしたんだろう、とても同じ私とは思えない。今の私には、自分の部屋の白い天井だけが世界だ。

急に何かとんでもない間違いを自分は犯しているような気がしてベッドの上で起き上がる。体を起こして壁にもたれかかってスマートフォンを眺める。いや、そこから出てくるラジオの音声に目を凝らしてみたと云ったほうが正しいかもしれない。今こうしてこのラジオを聴いてる人は日本中にどれくらいいるんだろう。その中で私みたいな思いをしている人はどれくらいいるんだろう。

あの頃の私と今の私は、同じようにラジオを聴いても感じ方は多分、全然違う。環境も全然違う。じゃあ、10年後、20年後は？どうせなら10年後、今と同じようにラジオに耳を傾けて今の私にメッセージを書いて欲しい。今の私の思っていることは未来の自分は覚えているだろうけど、今の私には未来の自分が何を考えているかなんて何もわからない。懐かしいナンバーにメッセージを添えて、今の冴えない私の毎日に素敵な音楽を届けて欲しい。そんなことを思う私の耳には、ガールズバンドの歌う元気な曲が聞こえてきた。